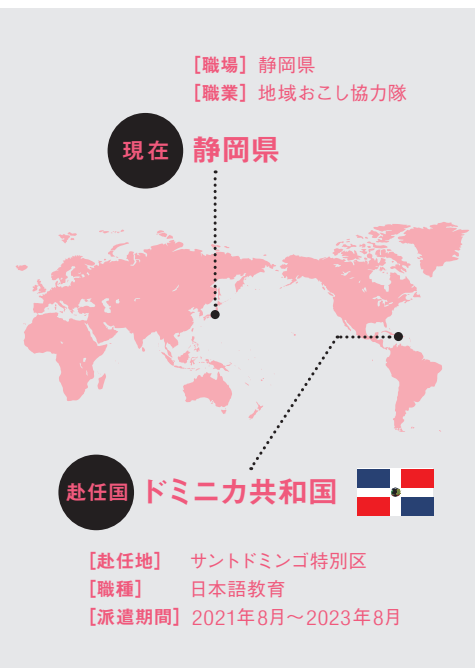




言葉で描く、子どもたちの未来と選択肢

山本 綾香さん 静岡県牧之原市 地域おこし協力隊・株式会社マキノハラボ
Ayaka Yamamoto

「一人ひとりに合わせて指導ができ、子どもたちの成長が見えておもしろい」
日本語教育だけでなく、外国籍住民の住居課題など暮らしそのものに向き合っている。

山本綾香さんは2025年7月、企業連携型の地域おこし協力隊として静岡県牧之原市に着任。JICA海外協力隊(JOCV)経験者の浅野拳史さんが代表を務める「株式会社マキノハラボ」に所属し、外国籍住民を対象とした日本語教室を担当する。マキノハラボは廃校を活用した宿泊・体験事業を展開する地域の拠点でもある。夏休みなどの繁忙期には宿泊やイベントを手伝うなど、教室の枠を超えて地域の生活現場に関わる仕事に大きなやりがいを感じている。

山本さんの現在地

外国につながる
子どもたちの学びを支える

牧之原市は工場が立ち並び多くの外国籍労働者が暮らしているため、来日直後の子どもたちが地域の学校へ入ると

たちまち言葉の壁が立ちちはだかる。こうした課題から、同市では「日本語初期支援教室いっぽ」をマキノハラボに委託。ここで山本さんは、週3日、少人数制で日本語や算数、日本の学校のルールなどを教えている。

JOCVとしてドミニカ共和国で日本語教育に従事した山本さん。「当時は一斉授業だったので生徒ごとのレベル差に悩むこともあったが、今は個別学習で理にかなった指導ができている」と話す。過去のもがきがあるからこそ、一人ひとりの進度に向き合い、成長を間近で見れる現在の活動に手応えを感じている。生徒たちのために、単語を覚えるアプリを自作するなど、現場の課題に応じた工夫にも力が入る。

2025年9月からは定時制高校でも週1回、授業前の夕方に日本語指導を行っている。ここでは日本語学習にとどまら

ず、大学進学を希望する生徒の進路相談に乗るなど、生活や将来に深く寄り添う支援も広がっている。

JOCV時代

言葉と文化の「架け橋」を
模索した2年間

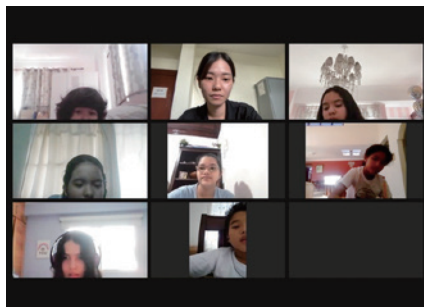
山本さんの日本語教育の原点は、大学時代のオーストラリア留学にある。現



オーストラリアでの授業の様子(2015年)



学習発表会の記念撮影（2023年）



オンライン授業の様子（2021年）



地方校での授業の様子（2022年）

地の小学校でアシスタントとして習字などを教えた際、子どもたちが目を輝かせて興味を持ってくれた経験から日本語教師を志すようになった。大学院で日本語教育を専攻した後、JOCVに応募した。

配属先は日系人コミュニティの日本語学校。首都サントドミンゴを拠点に、片道7時間近くかかる地方の学校へも巡回指導に赴くなど、精力的に活動する日々を送った。

現地で直面したのは、「継承日本語」という日本にルーツを持つ子どもたちが親から受け継ぐ日本語教育ならではの難しさだ。親に促されて通う子どもたちも多く、学習意欲の維持に苦心した。校長や保護者、ボランティアの間で役割や物事の進め方に対する感覚の違いにも戸惑った。主体的な行動を求められながらも周囲の納得を得ることのバランスに迷い「JOCVとしてどう振る舞うべきか悩むことも多かった」と山本さんは振り返る。

そうした中、温かい現地の人々に助けられた経験は深く心に残っている。出張先で財布を盗まれてしまった時のこ

と。バス会社の関係者が親身になって犯人を探し出し、半分ほど使われて帰ってきた財布を見て、警備員の一人がポケットマネーを渡して励ましてくれたそう。「悪い出来事だったけれど、私にとってはいい思い出。それから行くたびに事務所に立ち寄って一緒にコーヒーを飲むようになりました」

試行錯誤を重ねた2年間の経験と現地での温かい交流は、現在の支援現場における寄り添い方のベースとなっている。

未来へのビジョン

日本での暮らしと
未来を支える仕組みをつくる

山本さんの視線は、目の前の日本語教育にとどまらず、子どもたちや外国籍住民の「暮らし」そのものに向けられている。市内の外国籍住民を対象に生活や住居に関するアンケート調査を行うなど、現場に寄り添うための支援方法を模索する。また、住居探しの難しさから狭い環境で暮らさざるを得ない外国人世帯の現実を目にし、市内の空き家

山本 綾香さん プロフィール

大学院で日本語教育を専攻後、JICA海外協力隊としてドミニカ共和国へ派遣。帰国後、国際交流基金等を経て、2025年7月より静岡県牧之原市の地域おこし協力隊に就任。地域活性化拠点「マキノハラボ」に所属し、外国につながる子どもたちの日本語学習支援や、多文化共生のまちづくりに取り組んでいる。

を活用した「外国人向けの住居支援サービス」も検討中だ。

地域おこし協力隊の任期が終わった後のことも考えている。どこに行っても、日本語教育に職業として関わり続ける道を描く山本さん。地域にある空間を生かし、日本語を学び、交流できる場をつくるというアイデアも温めている。

「日本語が喋れなかった子が話せるようになったり、自分のルーツを知ること自信を持つ姿を見られるのが嬉しいです」言葉を教えることを通じて、子どもたちのアイデンティティを育み、日本での選択肢を増やしていく。山本さんの挑戦は、これからも地域や国境を越えて続いていく。

山本さんへのエール！

株式会社マキノハラボ
代表取締役
浅野 拳史さん



ユーモアあふれる人柄で社内に 活力と笑いをもたらししてくれる

山本さんは、教育への熱い思いを胸に、いつも前向きに、黙々と現場の課題に取り組んでいます。子どもや教育のことを、相手の立場に立ちながら冷静に考えられることは、山本さんならではの素晴らしい力です。これまでの協力隊や日本語教育の経験を活かし、新しい取り組みやプロジェクトと一緒ににつくっていきましょう。山本さんの挑戦と大いなる成長を、私も応援します！